

多田政一博士の著書から（96）詳細版

（1）病理學と病源學

理事 田中敏彦氏選

1935 年（昭和 10 年）刊行『綜統醫學提唱論』より

《本文》

緒論に述べたが如く今肝臓腫瘍で死せる病人もありとして、この肝臓組織を切り取って、染色検鏡※1の結果、癌組織を認めエオジン嗜好性細胞※2をその周囲※3に認めたというような特異な場合に、これは肝臓の癌病変による疾病だったと解決するのは病理學には違ひない。

然し何故肝臓が病変を起したかと云ふ全體上の病源は求めていないのが現代醫學であるし、又分化的進捗※4をのみ尊ぶ醫學に於て止むないことである。

今全醫學を綜統化する事により生まれて来る全體の目よりこの肝臓を冒した病源を體系的に求めて来るとどうなるであろうか？これが病源學である。それを先づ諸家の報文を借りて一個人を頭にうかべながら模型的思索※5を述べて、次にこうした全體動的病源學※6より生まれた治療の結末を本人の手記にかりよう。

而して余の述ぶる所は結局「萬病一如即多元※7」の所にあるが、本書はここまで進める筆勢※8をつけなかったが故に今ここに便宜上※9、大まかな疾病の系統上の分類を表題として理解を早めよう※10。

解説

《語句説明》

- ※1 染色検鏡：染色された試料（主に細胞や組織）を顕微鏡で観察することを指します。
- ※2 エオジン嗜好性細胞：エオジンという酸性の染料で強く赤～ピンク色に染まる細胞や細胞成分のことを指します。
- ※3 周囲：周辺
- ※4 分化的進捗：医学知の専門化・細分化が進み、個別臓器・細胞・病変単位での理解と治療が発展していく傾向を言います。
- ※5 模型的思索：生命や病を全体構造や秩序として“模型（モデル）化”して捉え、それを通じて根源的に思索しようとする事。

- ※6 全體動的病源學：生命全体の流れ・動きの中で病の原因を把握しようとする学問。
- ※7 萬病一如即多元：あらゆる病は、その根源・本質においては一つである（＝一如）。しかし現象としては、様々な姿・段階・場所・症状として現れる（＝多元）と言うこと。
- ※8 筆勢：書き手の精神・気力・個性・心意が“筆の動き”として表現されたもの。
- ※9 便宜上：その時々に応じたやり方で、その方が都合がよいので。
- ※10 疾病の系統上の分類を表題として理解を早めよう：病気をある“秩序だった枠組み”に分類して提示することで、読者が内容をすばやく理解できるようにしよう。

《詳細説明》

● 「病原学」について

《多田博士の言われる「病原学」と現代的な「病原学（pathogeny）」の違い》

『綜統医学提唱論』で「病原学」という言葉は、単に細菌やウイルスといった“病気の原因”を研究する現代的な「病原学（pathogeny）」とは異なる意味合いで使われています。

◆ 一般的な「病原学」との違い

現代医学での「病原学」とは、病原体（細菌・ウイルス・寄生虫など）の構造、性質、感染経路、毒性などを研究する学問で、細胞レベル・分子レベルで病因を探る、極めてミクロ的・機械論的なアプローチです。

しかし多田政一博士の言われる「病原学」は、病気の本当の根源（根本原因）を、生命全体や生命秩序との関係から把握しようとしています。

つまり、単に「病原体がいるから病気になる」というような表面的・物質的な病因論ではなく、なぜその人がそのような状態に陥ったのか、精神・意識・生き方との不調和がどう関係するのか、生命とは何か、病とは何かという「存在の本質」までをテーマとした哲学的・統合的な学問であるように思います。

◆ 『綜統医学提唱論』より

「今日の醫學は、肉體と病變の追跡を以てその全部と爲し、病の根源（びょうげん）を求める道に出ず。」

➡つまり、現代医学は「病気の本当の原因（病原）」を見ていない。だから、真の意味での病原学は確立されていないという問題点があります。

● 分化的進捗とは

ここでの「分化的進捗」は、単なる進歩や発展ではなく、現代医学の方向性そのものを批判的に表すための言葉として使われているようです。

例えば本文の『然し何故肝臓が病變を起したかと云ふ全體上の病源は求めているのが現代醫學であるし、又分化的進歩※⁴をのみ尊ぶ醫學に於て止むないことである』という言葉は、「現代医学」は、肝臓という臓器の病變を個別に診断・治療するが、「なぜその臓器が病變を起こしたのか？」という全体的な原因には目を向けないということです。それは、現代医学が“分化的進歩”を重視する性質を持っているからだと思われます。

要するに、多田博士が使われている「分化的進歩」という言葉は、病気や人体を細分化し、専門ごとに高度化し進展する現代医学の傾向を指す言葉です。多田博士は、現代医学に対し『全体的な原因や生命の統一的理解を欠いてしまうという欠点を含んだ“進歩”』だと言われています。

● 「模型的思索」とは

複雑な現象（例：生命、病、宇宙など）をある原理・構造に基づいて“モデル化”し、それを通して深く考察する方法論です。

要するに『生命や病を全体構造や秩序として“模型（モデル）化”して捉え、それを通じて根源的に思索しようとする』ことです。

このことは、医学を哲学の高みに引き上げ、患者の生き方と治療を一致させ、生命の理（ことわり）を正しく扱うための方法論でもありました。

● 「全體動的病源學」とは

綜統医学において極めて重要な概念です。これは現代医学が扱う“部分的・静的”な病因論に対して全体観を通して提唱されたものであり、病気の本質に対する哲学的・統合的理解を目的としたものであり、生命全体の流れや動きの中で病の原因を把握しようとする学問です。

◆ 現代医学と綜統医学とはどの様に違うのでしょうか？

〈現代医学の病原学〉

- ・対象：病原体、遺伝子、器官の障害
- ・病気の捉え方：部分の異常、機械の故障
- ・原因の時間軸：現在または直近の原因に注目

〈綜統医学の「全體動的病源學」〉

- ・対象：生命全体の調和・不調和の動的働き
- ・病気の捉え方：生命秩序の歪み、全体調和の破れ
- ・原因の時間軸：過去から続く生命のプロセス・精神的偏向

◆なぜ「全体」で「動的」でなければならないのかと言うと、病は突然やってくるもの

ではなく、長い生命の営みの中での帰結なのです。

・病は精神・習慣・思考・体質などの「全体的かつ時間的プロセス」の中でつくられます。

・だからこそ、病の本当の原因（病源）は、動的な生命の流れ全体を見なければ把握できないのです。

このようにして提唱されたのが、「全體動的病源學」であり、そこから「真の癒し（＝秩序の回復）」を目指すのです。

◆まとめると

全體動的病源學とは

- ・生命全体の流れとして病を捉え、その根源を明らかにしようとする学問
- ・身体・精神・霊・生活との関係を含む「全生命プロセス」
- ・動的（プロセス的）であり、全体的、統合的
- ・病気の意味と根源を正しく理解し、生命秩序の回復を導く

●「^{よろずびょういちによそくたげん}萬病一如即多元」とは

「萬病一如即多元」という表現は、綜統医学の核心を言い表していると思います。

すべての病は“本質的には同じ”でありながら、現象としては“多様なかたち”をとるという教えです。

◆言葉の構造と意味

萬病（万病）：あらゆる病気（内科・外科・精神・急性・慢性などを問わず）

一如（いちによ）：「本質的に一つであること」「同一原理に由来すること」。

即（すなわち）：すなわち、イコールであるという意味。

多元（たげん）：多様な現れ方、異なる様相、多様な表現形。

◆「萬病一如即多元」の詳しい説明

「あらゆる病は、その根源・本質においては一つである（＝一如）。しかし現象としては、様々な姿・段階・場所・症状として現れる（＝多元）。」という、統一と多様性がイコールであるという真理を述べているのだと思います。

病気の違い（癌、糖尿病、うつ病、アトピーなど）は現象にすぎず、それらは生命の綜統（全体秩序）の破れという共通の本質から生じていると言うことです。

すなわち、病は本質的には「一」でありながら、現象的には「多」であるということでしょう。

◆ なぜ「萬病一如」なのかを考えてみる

生命は本来、「霊・心・体」が調和した統一的秩序を持っていて、その秩序に歪みや破れが生じると、「病」として現れると考えます。(WHO も同じ)

その歪みの本質は共通しており、「自我の偏^{かたよ}り」「自然や宇宙の理からの逸^{いつだつ}脱」などが根源になっています。だからどんな病も根本原因は同じ（＝一如）ということになります。

※自我の偏り：自我とは「自分がこうでなければならない」「こうあるべきだ」というこだわり（執着）や思い込みの事なので、それが極端に偏ると心と体の自然な流れや調和^{くず}が崩れてくるのです。

◆ 「即多元」とはどういうことか？

同じ原因から来ていても、人によって現れる場所（肝臓・胃・皮膚・神経など）、病^は気^{かい}のかたち（炎症・変形・破^は壊^{かい}・過^か剰^{じょう}）、時間の経過、年齢、気質によって無数の「症状」として現れることになる。したがって現象的には“多元”でも根源的には“一如”なのです。

◆ 要するに『萬病一如即多元』とは

あらゆる病は一つの本質から来ており、それが多様に現れているということです。

すべての病の根は同じ（＝一如）ですが、その現れ方は多様（＝多元）であるので、病気を「生命の綜合統一としての破れ」として全体的・統合的に捉える視点で診るのです。

治療の現場としては、病名や部位ではなく、生命秩序全体を調和させることを根本的に考えて治療に当たるのです。

《所感》

今回は綜統医学的人間観察の基準となるような言葉が頻^{ひん}繁^{ぱん}に出てきますが、人間逸脱の原因を見極めるには全体観で診る必要があります。

現代の医学は発展しているように見えますが、病気の原因の解明や治療法が進んだと言うより、医学的テクノロジーが進歩しているのだと言えるでしょう。